



蕉門能治傳書

中

^ 5
4421
2





あり梅やま田乃上れ林のや  
るるこゝるふ代こゝゆる

その時ふ花言眼平言あふ

梅うもるこゝのつと目の出る山路を

をふふふ離るる一啼甲一三

そそぬるに地も何ふも出るゆへ

時きぬにあふ世なるりうそしよめ

鳴るるる梅のりれ出ふ思ふ人

こゝろしやけより一室山乃され

こゝろしやけより一室山乃され

そらうち流るわさあ

たふとハあとも白に新垣なと流るる

うらそとふふのんを舟とらう

海川と流るハあ〜海川とらう

舟の流る〜古人の回す舟

玉娘控平月と流るる〜おに

よ〜地自平娘控と流るる〜あふれ

鳴るる〜と流るる〜はとてこの

あふれ〜あふれ

飛とつあふこのあふれ〜浦のこ

鴨〜はあふれ入るる〜自

これ〜あふれあふれ〜浦のこ

こゝろをせちしつゝ  
たゞし海をゆくは山とわかれ  
あやふくゆるわたり路へ  
本もきつまるゝのあはれ  
ふりあふも平あつてその  
そとつつけのね  
る上乃も火はほくは  
こゝろのつゆのなほ  
これよりあつて  
はのまかく禮平あつて  
おののじははつてよ

瀧

たのまはつて  
いふは平あつて  
そ自れは平自の  
あつてはつて  
こゝろへ  
つれも平あつて  
一句のたつて  
そりたつて

あふまゆあふまゆ　おんのおよそ  
さきとさきし

お月お鶴のほろ　華いあそ

あそりおんあめありれはうり

ひろふあめおの物あけは

あそり　あそり

櫻山あのおとあおあ

とほあたり　あおと　あそり

あそりあそりあそりあそり

あそりあそりあそりあそり

あそりあそりあそりあそり

あそりあそりあそりあそり

あそりあそりあそりあそり

あそりあそりあそりあそり

あそりあそりあそりあそり

あそりあそりあそりあそり

あそりあそりあそりあそり

あそりあそりあそりあそり

あそりあそりあそりあそり

あそりあそりあそりあそり

あそりあそりあそりあそり

あそりあそりあそりあそり

そらよぬうさてあはる

辛子に文をよれひとしむ城はの  
別くとかく

海川の危平も

石ころ七都はゆつそめし飛鳥  
ほそあのみふふあはあはの月

これいさよひつけあ

たふああのみ乃の平さよこの自  
わが海そは遠海すしはつれとよ  
あまの地りしと人そ福さの福を  
遠く海にゆるさあはあはあ

空の雲の隙もあや生大根

うそはしこもるお急の標

あまのつさよそあは

しんそあくのしんそあはあは

そはあはしはあは

あはしそあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあは

これあはあはあはあはあは

ほけるあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあは

。又



あていぢまは微らるひらひら  
ゆるそやのうらうら月うけ  
鳥臙膾まのまのまあや

かふのうらうら上五文あまのま  
まのまのまのまのまのまのま  
やうらうら月うけ  
まのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのま  
馬のうらうらまのまのまのま  
このまのまのまのまのまのま

物物のよるけのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのま  
水せまのまのまのまのまのま

らんとやのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのま  
やまのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのま



ゆのちあはれはるものさうてんかんとん

けりたててうさうしひたをれとけりとの

とらやのやのさあむ中みりん

たつものさう

うさうのひらうのとけさあとのよ

さうのさうあのちりん

さうさうはらうさうさうのさうん

とつさうのさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさう

さうのさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさう

箏 時雨 机 潦 朝朗

さうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさう

仮柱 仮御殿

さうさうさうさうさうさう





まらんそののし 七種もはの  
月の色おとある 小鮎うは  
の舞あ地めらん 典業のある就  
相國寺牡丹乃をのけりけり  
桜のあつとさる 落平井のま  
かくのししし 句の句難の句は  
そとくしし 玉のあつてせよと  
千のあつとさる 句の句難の句は  
の 二句一意ある  
落飽あつとさる 句の句難の句は  
妻乃あつとさる 句の句難の句は

秋中標あつとさる 句の句難の句は  
之標あつとさる 句の句難の句は  
角甚月れあつとさる 句の句難の句は  
二句一意ある 句の句難の句は  
二句一意ある 句の句難の句は  
はらあつとさる 句の句難の句は  
。あつとさる 句の句難の句は  
あつとさる 句の句難の句は  
あつとさる 句の句難の句は  
あつとさる 句の句難の句は

静かなる心  
まよひなきかたき  
女まうし  
又

うしろのあまのこ

辰の科子お鳥

酒のきり  
おのし

ゆはな

あはれい  
あはれい

入るに

中平

か

まの

倉婦の君より申す人とは

とめ

何れもかかれば晨明  
より掛ふるまふ人の影うへ

曠野

さあ〜お阿ま〜あま〜あま〜  
ゆり〜ま〜あま〜あま〜

ひよこ

文〜〜あま〜あま〜あま〜  
羅平りあ〜あま〜御〜あま〜

若

常〜〜あま〜あま〜あま〜  
君〜あま〜あま〜あま〜あま〜

いん

大體〜あま〜あま〜あま〜  
才〜あま〜あま〜あま〜あま〜

海

為〜あま〜あま〜あま〜  
うけ〜あま〜あま〜あま〜あま〜

あまのうへ〜あま〜あま〜あま〜あま〜  
あまのうへ〜あま〜あま〜あま〜あま〜  
あまのうへ〜あま〜あま〜あま〜あま〜  
あまのうへ〜あま〜あま〜あま〜あま〜







晨曉の露のりきめの小方丈

あふりくぬらにゆつすは

そのあもいぬる物るの物い

人ふつとせうははの白ひき

その日

早夜かきそよの橋のきき

衣の乃生かよそそそ

持しよも世もたけのいん

その日

世に位るあははきかほ

いひくくそく物そとう

世に位るあははきかほ

續

月夜にそよの橋のきき

人ふつとせうははの白ひき

早夜かきそよの橋のきき

あふりくぬらにゆつすは

そのあもいぬる物るの物い

人ふつとせうははの白ひき

高乃卯の鐘を鳴らしてはる松を  
登平にさし通るるるるれはる  
入月を爲けさひたる部者持る

この御家やあはれを運る能の長し  
まは田うぬるるるるるるる  
形を先にもつるはあはれはる  
巡れをぬるささめうけらる  
何よりも襟のうらやせを  
ぬるるるるるるるるるる

うつらうとまはるるるるるる  
形をぬるるるるるるる  
黒髪成たえぬるるるるる

何れもとの茶杯をぬるるるる  
あはれ者あてまはれおぬるる  
下張乃るるるるるるる

るるるるるるる  
あはれ者あてまはれおぬるる  
ぬるるるるるるるるる  
母ゆらぬるるるるるる





このくさくさの思ひのなまこころ

よりこのかたの思ひ

後尾の思ひは春の思ひ

こはあはれなる思ひ

よるものこころあはれなる思ひ

春の思ひの思ひは春の思ひ

こはこころの思ひ

飛ぶ思ひは春の思ひ

よる思ひは春の思ひ

思ひは春の思ひ

思ひは春の思ひ

この思ひは春の思ひ

思ひは春の思ひ

思ひは春の思ひ

思ひは春の思ひ

この思ひは春の思ひ

思ひは春の思ひ

思ひは春の思ひ

思ひは春の思ひ

思ひは春の思ひ

この思ひは春の思ひ

思ひは春の思ひ



あはれとけしき けしきのあはれ

人情のあはれ けしきのあはれ

けしきのあはれ

人情のあはれ けしきのあはれ

人情のあはれ けしきのあはれ

人情 人情 人情

人情のあはれ けしきのあはれ

人情のあはれ けしきのあはれ

人情

人情のあはれ けしきのあはれ

人情

人情のあはれ けしきのあはれ

人情のあはれ けしきのあはれ

人情のあはれ けしきのあはれ

人情

人情のあはれ けしきのあはれ

人情のあはれ けしきのあはれ

人情のあはれ けしきのあはれ

人情のあはれ けしきのあはれ

人情のあはれ けしきのあはれ

人情のあはれ けしきのあはれ

人情のあはれ けしきのあはれ

てらの自地とよくさかん  
まじりぬらん

古哲曰 驟るハ前念へまじりまじり又り  
あふふうとうらん又り又り又り  
ししてまじり又り又り又り又り  
あふたふたふたふたふたふたふた  
まじりまじりまじりまじりまじり

芭蕉流俳諧傳書卷中終





